

// 卷 頭 言 //

社会福祉法人日本ライトハウス
理事長 橋本 照夫

令和の時代を迎えて

「令和」は、人々が美しく心を寄せ合う中で、文化が生まれ育つという意味が込められています。厳しい寒さの後に春の訪れを告げ見事に咲き誇る梅の花のように、一人一人の日本人が明日への希望とともにそれぞれの花を大きく咲かせることができる、そうした日本でありたいという願いが込められて決定されました。障害者一人一人が明日への希望とともに、それぞれの花を大きく咲かせることができる社会の実現をめざし、我々も尽力していく所存です。

さてここで、日本ライトハウスの視覚障害リハビリテーションセンターが歩んできた道程について振り返っておきたいと思います。二代目岩橋英行理事長は、「共歩共生」を掲げて我が国で初めての視覚障害者のためのリハビリテーションセンター「職業・生活訓練センター」を昭和40年9月に開所しました。当初は通所利用として生活訓練を開始し、昭和41年3月に第1種事業失明者更生施設として認可を受け、入所・通所利用者の充実を図りました。また、本誌「視覚リハビリテーション」を発刊することになった「歩行訓練指導員」の誕生は、昭和45年7月に日本ライトハウスとアメリカ海外盲人援護協会（AFOB：ヘレン・ケラー女史の活動の拠点）の共催、厚生省・文部省の後援で、日本で初めての「歩行訓練指導員養成講習会」を開催し、12名に歩行訓練士のライセンスを授与しました。その後、昭和47年7月に厚生省の委託事業として「盲人歩行訓練指導員研修会」が開催され今日にいたっています。

視覚に障害のある方へのリハビリテーションの提供環境は整備されては来ましたが、当時は医療関係者の視覚障害リハビリテーションに対する理解が得られていなかった時代でした。医療と福祉の連携が図れる契機となったのが、昭和61年11月14日大阪市身体障害者スポーツセンターで開催した'86盲人福祉展（日本ライトハウス・大阪府盲人福祉協会・大阪市盲人福祉協会共催）で、そのテーマは「医療と福祉の連携をいかに進めるか」でした。このときの基調講演を、当時の大阪大学医学部眼科教授 真鍋禮三先生にお願いしました。演題は「医療の進歩とその限界」でした。真鍋先生はそのなかで、医師の使命は病気を治すことですが、「目の病気で失明につながる病気もある。治療しても、

それ以上悪くなることを防ぐことはできても、悪くなってしまったものを元に戻すということがほとんどできない場合に、我々は医療の限界を感じる。我々医師というのは、この限界に達しないように常に努力しているわけですが、不幸にしてこの限界に達した患者さんを診た場合には、勇気を持ってリハビリを進めなければならないということになります。視覚以外の機能を高め、それによって視覚を補っていくということに期待をせざるを得ない。」と話されました。障害（失明）告知は、医師として限界を認めることとなるので告知するのが難しいが、患者さん本人のことを考え、告知を躊躇せずにおこない、リハビリテーションセンターへ繋げることが強調される契機となる「盲人福祉展」となりました。

それから4年の準備期間を経て平成2年11月、第1回「医療関係者視覚障害リハビリテーション研修会」を、日本眼科医会・日本ライトハウスの共催、大阪府眼科医会後援で年1回開催し既に501名の方々が受講されました。毎回全国から参加される医師・看護師・視能訓練士等医療関係者に対して視覚障害リハビリテーションの基礎的知識について実技と講義を3日間開催しています。毎回応募者数は定員一杯となります。このようにニーズがあることから、医療関係者の方々が、失明告知を受けた患者さんに対して、無為な時間を過ごすことなくスムーズに視覚障害リハビリテーションへ移行させることの重要性について認識され、医療機関と視覚障害リハビリテーション機関との連携を図るようになりました。視覚障害リハビリテーション機関は、決して「医療の下請け」ではありません。「共通の目的意識を持って受け継ぐ受け皿」として存在する意義があるのです。

こうして医療機関と視覚障害リハビリテーション機関とは、それぞれの立場を理解して連携が深まったのが平成の時代を迎えてのことです。さて、令和の時代の視覚障害リハビリテーション機関の在り方ですが、社会制度は地域の社会資源を活用するように進められています。視覚に障害のある方は高齢化し、重複化しており、支援の仕方も障害の程度によって変わってきています。

二代目理事長が提唱していた昭和の時代を経て、ようやく令和のいま「共生」の真の支援の在り方を問われる時代を迎えようとしており、私たちはこれからも一層地域利用者の受け入れ間口を広げるとともに、在宅支援サービスへの充実に努めてまいりたいと思います。

参考文献：「'86盲人福祉展報告書 医療と福祉の連携をいかに進めるか」
「医療関係者視覚障害リハビリテーション研修会」